

【令和3年度実績】

1. 外部資金獲得額の増加

No.34 ①-1 世界標準の産学連携マネジメントの推進

No.65 ①-1 外部研究資金の拡充

実績報告

○本研究科では、SDGs 達成に資する人材の養成を目標の1つとする国際コース「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム」を令和元(2019)年度に立ち上げた。同プログラムは、教育への還元を念頭に、リスクマネジメントや資源リサイクルなどに関わる産学官連携の活動を展開している。代表的なものとして、MS&AD インシュアランスホールディングス株式会社からの寄附による寄附講義「プロジェクト・リスクマネジメント II」の開講や科学技術振興機構(JST)の研究成果展開事業 大学発新産業創出プログラム(START)に採択された「プラスチック製容器包装廃棄物の高度選別装置の事業化」(研究分担者として参画)などがある。

これらの取組により、外部資金(受託・共同研究費、寄附金)の獲得額が毎年度堅調に増加している(表1及び図1参照)。

表1 外部資金(受託・共同研究費、寄附金)獲得状況(円)

	R1	R2	R3
受託・共同研究費	4,500,000	5,976,550	15,274,000
寄附金	6,197,072	10,060,000	6,900,000
合計	10,697,072	16,036,550	22,174,000

図1 外部資金(受託・共同研究費、寄附金)獲得状況(円)

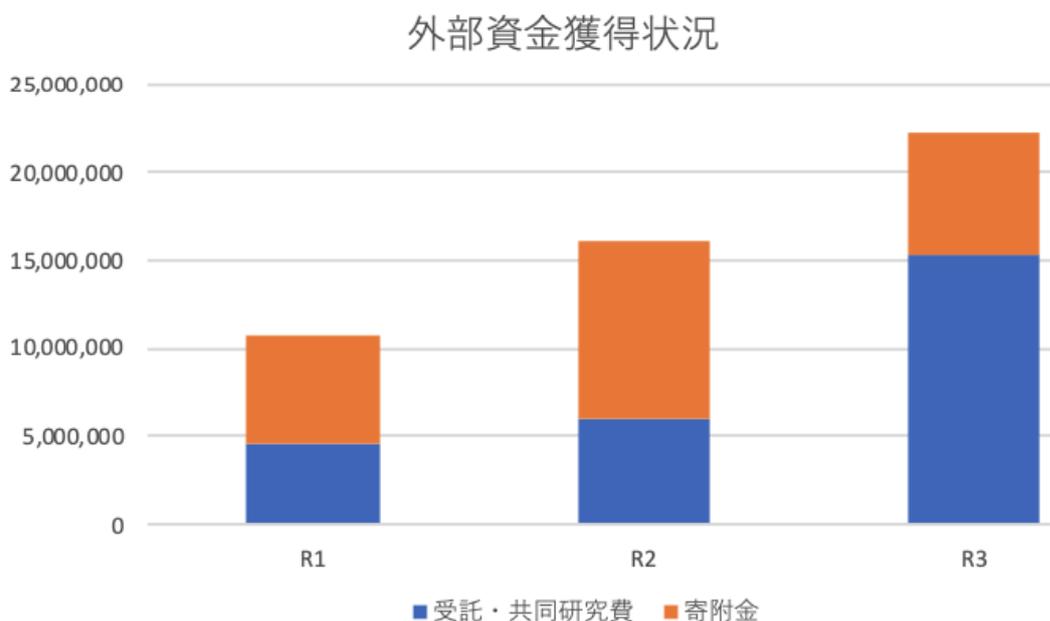


表 1.png, 図 1.png

2. SDGs 教育の展開

No.03 ②-2 大学院教育の充実

No.07 ②-6 世界を牽引する高度な人材の養成

No.34 ①-1 世界標準の産学連携マネジメントの推進

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

実績報告

○本研究科では、SDGs 達成に資する人材の養成を目標の1つとする国際コース「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム」を令和元(2019)年度に立ち上げた。同プログラムは産学官連携研究に取り組んでおり、研究成果を地域の学校教育や本学の全学教育に積極的に還元している。

・東松島市において小学校での出前授業を行っている。この3年間で学校数は1校から5校に増加し、受講生徒数も30名から154名に増えている(表2及び図2-1参照)。活動の様子は新聞、テレビの他、東松島市のウェブサイトでも紹介されている。

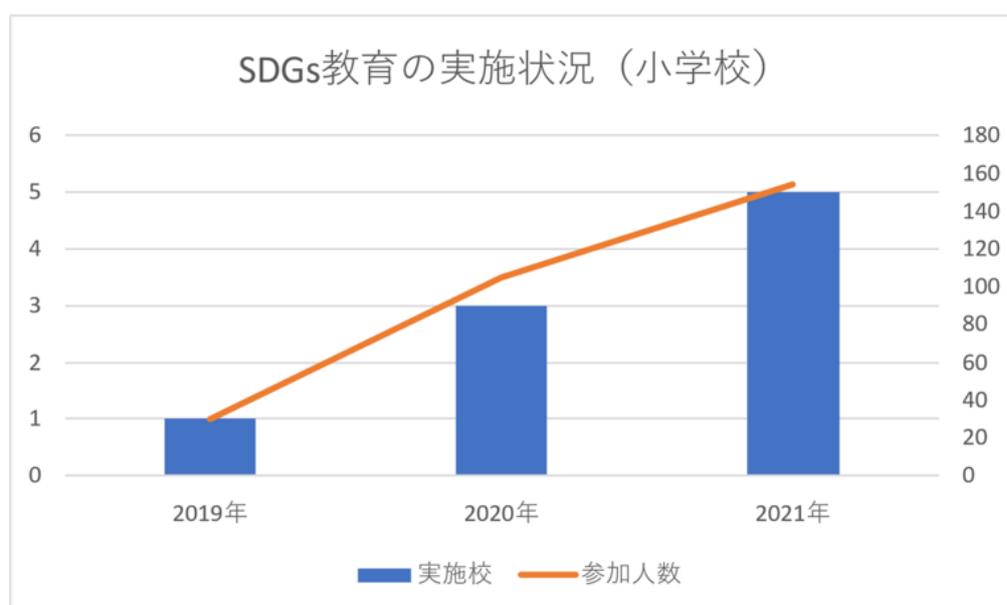
(<https://www.city.higashimatsushima.miyagi.jp/index.cfm/22,30997,69,289,html>)

表2 東松島市での出前授業の学校数と生徒数

2019年	東松島市立赤井小学校	30
2020年	東松島市立赤井小学校	25
	東松島市立矢本西小学校	61
	東松島市立大塩小学校	19
	小計	105
2021年	東松島市立赤井小学校	25
	東松島市立矢本西小学校	49
	東松島市立大塩小学校	23
	東松島市立鳴瀬桜華小学校	41
	東松島市立宮野森小学校	16
	小計	154

年度	実施校	参加人数
2019年	1	30
2020年	3	105
2021年	5	154

図2-1 東松島市での出前授業の学校数と生徒数



参考資料2 河北新報での紹介記事(ウェブサイトより切り抜き)

SDGs推進 東松島市、小学校で出前授業 再資源化の大切さ学ぶ

2021年11月13日 11:16

「持続可能な開発目標（SDGs）」を推進する東松島市は、市内5小学校の4年生を対象に、廃プラスチックの処理や再資源化をテーマに、産学官連携による出前授業を開いた。

矢本西小（児童320人）で2日にあった授業には4年生49人が参加。東北大学院国際文化研究科の劉庭秀（ユ・ジョンズ）教授や、プラスチック素材の製造会社や再資源化会社の担当者らが講師を務めた。



リサイクル素材で作られた製品を見ながら、再資源化に理解を深める児童たち

劉教授は世界の廃プラ発生量が35年間で6倍に増え、貧困国では拾ったごみを売って生活する人がある実態を解説。分別して資源に戻す重要性を説き「無駄をなくして物を大切に使うことも大事。修理して長く使う、必要な人に譲るなど、できることから取り組もう」と呼び掛けた。

児童たちは、アルミバック飲料の容器を縫い合わせたバッグや、プラ製品を再生した素材で作られた工芸品などを間近に見た。不要家電から採取した金属は、東京五輪のメダルの原料にも使われたと説明を受けて歓声を上げていた。

菅原結衣さん（10）は「ごみと思っていたものが資源になると学んだ。世界の海がごみであふれていると知り、捨てない努力が大事だと思った」と話した。

東松島市は2018年、内閣府から「SDGs未来都市」の認定を受け、出前授業は3年目。

(<https://kahoku.news/articles/20211113khno00016.html> より)

・令和3(2021)年度後期から本学の全学教育において開講されている「SDGs 入門」において本研究科教員が運営を担当している。学期末に実施された授業評価アンケートでは、「総合的に見て良い授業だった」という問いに回答者の全てが「はい」または「+」「はい」と「どちらとも言えない」の中間」と回答し、高い評価を得た(図 2-2 参照)。

図2-2「SDGs 入門」授業評価結果

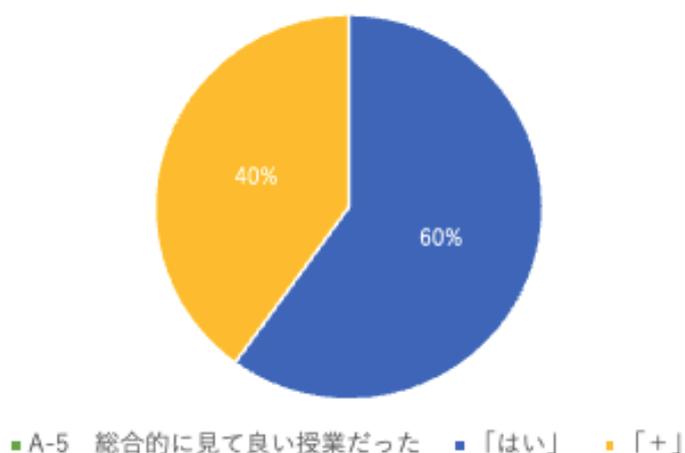


表 2.png, 図 2-1 SDGs 出前授業実績グラフ.png, 出前授業河北新報オンライン記事.png, 図 2-2 SDGs 入門評価結果円グラフ.png

3. 男女共同参画における社会貢献の取組

No.41 ①-2 国際発信力の強化

No.42 ①-3 グローバルネットワークの形成・展開

No.60 ②-3 男女共同・協働の実現

実績報告

○本研究科の男女共同参画推進委員会は、男女共同参画推進のための取り組みとして、一般市民にも開放する形でマヤ人女性作家のソル・ケー・モオ氏によるオンライン講演会「かつての女性と今の女性、そして彼女らの文学」を実施した。参加者を対象にしたアンケートでは高い評価を得た。(関連 URL <https://www.intcul.tohoku.ac.jp/event/ソル・ケー・モオ氏オンライン講演会「かつての」/>)

・ソル・ケー・モオ氏はマヤ語で小説を書く先住民女性作家として数々の小説を執筆し、国際的にも脚光を浴びつつある。日本では、本研究科所属の吉田栄人准教授によって『穢れなき太陽』(2018年、水声社)と『女であるだけで』(新しいマヤの文学、2020年、国書刊行会)が翻訳出版されている。吉田准教授は、前者の翻訳により2019年度の日本翻訳家協会翻訳特別賞を受賞している。

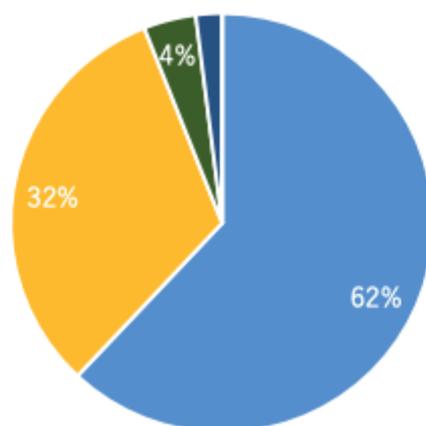
・研究科ウェブサイトでは、講演会の主旨として「ソル・ケー・モオ氏の文学は自らの経験に基づいた、先住民女性の悲しみと怒りをこめた社会に対する告発でありながら、「女であること」が抱える普遍的な問題の解決のための連帯を訴えるものです。その声に耳を傾けることは、私たち日本人にも社会や文化の違いを乗り越えて、女性が置かれている状況に深い洞察を与えてくれる機会となるでしょう。」と述べられている。

・参加者を対象にしたアンケート(参加者総数 96 名のうち 50 名が回答)の結果は表3及び図3の通りである。

表3 ソル・ケー・モオ氏講演会アンケート結果(人数)

とても良い	31
良い	16
普通	2
あまり良くなかった	1
良くなかった	0
合計	50

図3 ソル・ケー・モオ氏講演会アンケート結果(%)



- ソル・ケー・モオ氏講演会アンケート結果
- とても良い
- 良い
- 普通
- あまり良くなかった
- 良くなかった

 表 3.png,  図 3.png

4. 国際的な日本学研究の研究教育拠点形成の取組

No.03 ②-2 大学院教育の充実

No.21 ①-3 国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進

実績報告

○本研究科国際日本研究講座に在籍する教員は近代日本の宗教・思想に焦点を当てた研究教育活動を展開し、この分野における国際的な研究教育拠点となることを目指している。研究科も

研究科長裁量経費などにより活動を支援しており、今年度は聖徳太子 1400 年遠忌に合わせて国際シンポジウムを開催した。これを含め、海外研究者の受入や招待講演会などの取組の成果が学生の研究活動に顕著に現れている。

・近代日本の宗教・思想に関する国際的な研究を推進している研究チームは、研究科長裁量経費の補助をうけ、2022 年3月5日に聖徳太子の 1400 年遠忌に合わせた国際シンポジウムを開催した。参加者へのアンケートでは、「今回のイベントは全体として有益でしたか」という設問に、「とても有益だった」が 77.1%、「有益だった」が 17.1%で、高い評価を得た。

2022年
3月5日
(土)
14:00-16:30
オンライン開催

東北大学

第3回 国際学術大会
日本学研究会

国際シンポジウム
聖徳太子の近代

アーサー・ダフランス (Ecole Pratique des Hautes Etudes)
太子の使者——歌文の文獻における聖徳太子

ユリア・ブレニナ (大阪大学)
近代の日蓮仏教における聖徳太子像の種々相

オリオン・クラウタウ (東北大学)
書法作者としての聖徳太子のイメージ形成

コメント：石井公成 (駒沢大学名誉教授)

主催：日本学研究会(東北大学)
共催：文学研究科(現代日本学専攻)、国際文化研究科(国際日本研究講座)
一般来賓歓迎！お申し込みはこちら：
http://bit.ly/tohokuz_3rd-conference

・同チームは国際的な研究ネットワークの形成を目指し、今年度はシカゴ大学、レイクフォレストカレッジ(いずれも米国)、及びイースト・アングリア大学(英国)から客員研究員を受け入れている。また、5件の国際講演会・ワークショップを開催し(2019 年度は8件、2020 年度は4件)、学生に国際的な研究に接する機会を提供している(以下にポスターを添付)。

TOHOKU UNIVERSITY
School of Int'l. Cult. Studies
Dept. of World Japanese Studies

ONLINE LECTURE

Anarchism Meets Geography in Early Twentieth-Century Japan: Ishikawa Sanshiro's Worldview

Nadine Willems
(University of East Anglia)

April 23, 2021 (Fri.)
16:30-18:00 (JST)

Registration Deadline: April 19, 10 AM (JST) at <http://bit.ly/willems-lecture>

ONLINE WORKSHOP

EARLY MODERN ENCOUNTERS: CHALLENGES AND APPROACHES

Nationalizing Religion: the Jesuit Evangelization Scheme for Japan
Renata Cabral Bernabé (UNIC/Tohoku University)

Mark's Dog: Sages and Dogmas on the Problem of Spirit in Japan
Ribeiro da Silva Eluf (Max Planck Institute)

September 13, 2021 (Mon.)
11:30-13:30 (GMT+1); 19:30-21:30 (JST)

Registration Deadline: Sep. 12, 8 PM (JST) at <https://bit.ly/SMLC-Tohoku>

Contact: res2013@gmail.com

TOHOKU UNIVERSITY
School of Int'l. Cult. Studies
Dept. of World Japanese Studies

ONLINE LECTURE

Toward a History of South China Sea Buddhism

Jack Meng-Tat Chia
(National University of Singapore)

Nov. 12, 2021 (Fri.)
16:30-18:00 (JST)

Registration Deadline: November 12, 10 AM (JST) at <http://bit.ly/chia-lecture>

TOHOKU UNIVERSITY
School of Int'l. Cult. Studies
Dept. of World Japanese Studies

ONLINE LECTURE

Religion in a Global Context: Early Modern Globalization and the Catholic Missions

Renata Cabral Bernabé
(State College, Florida University)

Dec. 3, 2021 (Fri.) 16:30-18:00 (JST)

Registration Deadline: December 3, 10 AM (JST) at <https://bit.ly/bernabe-lecture>

TOHOKU UNIVERSITY
School of Int'l. Cult. Studies
Dept. of World Japanese Studies

ONLINE LECTURE

Imperial Secularization and the Politics of Religious Nationalism in Postwar Japan

Mark R. Mullins
(University of Auckland)

Jan. 28, 2022 (Fri.)
16:30-18:00 (JST)

Registration Deadline: Jan. 26, 10 AM (JST) at <https://bit.ly/mullins-lecture>

・上記の取組の成果が学生の研究業績に顕著に現れている(同チーム在籍学生数:2019 年度5名、2020 年度7名、2021 年度5名)。

図4-1 学生論文数の増加

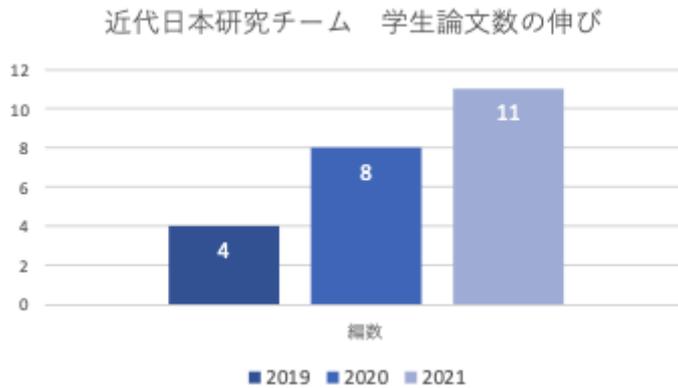
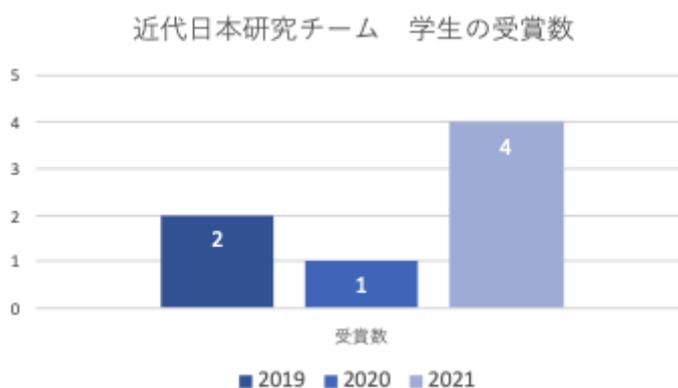


図4-2 学生による受賞数の増加



国際シンポジウム.png, ポスター.png, 学生論文数.png, 学生受賞数.png

5. 言語科学研究における国際共同研究の推進

No.21 ①-3 国際的ネットワークの構築による国際共同研究等の推進

No.25 ③-1 新たな研究フロンティアの開拓

実績報告

・本研究科附属言語脳認知総合科学研究センターは令和元(2019)年度から、**個別化外国語教育法**という新しい領域の確立を目指し **UCL との連携を戦略的に推進**している。研究科も研究科長裁量経費の配分や海外クローポの活用など組織的に支援してきた。

令和元(2019)年度 キックオフシンポジウムを東北大学と英国で開催

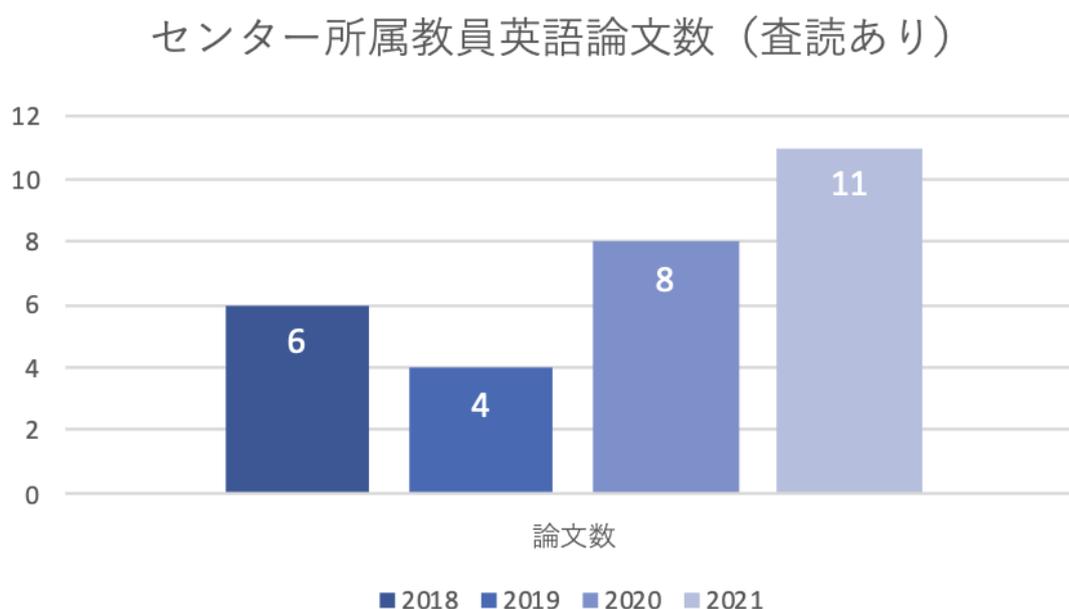
令和2(2020)年度 UCL の研究者 1 名と業務委託契約(海外クローポ制度)、UCL の研究者による講演会を開催(1件)

令和3(2021)年度 UCLの研究者による講演会を開催(1件)、国際共著論文1編(2022年3月5日時点で in press)、国際学会発表1件(2022年3月19~21日に開催)

・途中パンデミックにより研究者の往来が難しくなり、実験も計画通りに進められない時期もあったが、共同研究プロジェクト実施3年目の令和3(2021)年度に初めて具体的な成果が得られた(国際共著論文1編、国際学会発表1件)。論文が掲載される学術雑誌(*Bilingualism: Language and Cognition*)は、インパクト・ファクターが3.532で、言語学分野では評価が高い。

・上記の取組を中心として、同センターでは国際的な研究活動を推進しており、成果として所属研究者(国際文化研究科本務教員7名)による英語論文数が増加傾向にある。

図5 言語脳認知総合科学研究センター本務教員による英語論文数の推移



 センター論文数推移.png